第３章
パラリンピアンに対する社会的認知度調査

調査概要

(1)調査目的

パリ 2024 パラリンピック競技大会開催後のパラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。前回調査との比較を行い、変化、傾向、要因などを調査する。

(2)調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

- パラリンピアンの社会的認知度
- パリ大会の視聴状況
- 大会観戦後の感想
- デフリンピックとアジアパラ競技大会の認知度
- 日常生活におけるスポーツ環境

(3)調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

(4)調査期間

2024 年 11 月 10 日(日)～2024 年 11 月 11 日(月)

(5)調査方法

インターネットによるウェブ調査

当財団調べ(マクロミルモニタを利用)

(6)回答結果　回答者数:2,060 人

東日本エリア/男性/20 代	103	西日本エリア/男性/20 代	103
東日本エリア/男性/30 代	103	西日本エリア/男性/30 代	103
東日本エリア/男性/40 代	103	西日本エリア/男性/40 代	103
東日本エリア/男性/50 代	103	西日本エリア/男性/50 代	103
東日本エリア/男性/60 代以上	103	西日本エリア/男性/60 代以上	103
東日本エリア/女性/20 代	103	西日本エリア/女性/20 代	103
東日本エリア/女性/30 代	103	西日本エリア/女性/30 代	103
東日本エリア/女性/40 代	103	西日本エリア/女性/40 代	103
東日本エリア/女性/50 代	103	西日本エリア/女性/50 代	103
東日本エリア/女性/60 代以上	103	西日本エリア/女性/60 代以上	103

（7）調査報告ならびにトピック内に示した図表の注意事項

- 帯グラフにおいて 3％未満のデータラベルは非表示とした。
- クロス集計においては、原則x^2検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1％を▲▼、5％を△▽、10％を∴∵で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

（8）大会名の略称

本報告書では、夏季パラリンピック競技大会の名称は以下の表記とする。

- 北京 2008 パラリンピック競技大会（以下、北京大会）
- ロンドン 2012 パラリンピック競技大会（以下、ロンドン大会）
- リオデジャネイロ 2016 パラリンピック競技大会（以下、リオ大会）
- 東京 2020 パラリンピック競技大会（以下、東京大会）
- パリ 2024 パラリンピック競技大会（以下、パリ大会）

要約

- ◆ 最も認知度が高い選手は「小田凱人」(30.8%)で、ついで、「上地結衣」(21.9%)、「池崎大輔」(12.6%)、「木村敬一」(7.6%)、「伊藤智也」(7.3%)であった。
- ◆ 実施競技の正答率が最も高かったのは「小田凱人(車いすテニス)」(87.1%)で、ついで、「上地結衣(車いすテニス)」(72.3%)、「木村敬一(水泳)」(58.3%)、「道下美里(陸上競技)」(56.2%)、「池透暢(車いすラグビー)」(43.7%)であった。
- ◆ パリパラリンピックの観戦形態は、「テレビでニュースを観た」が 44.6%で最も多く、ついで、「テレビで中継・録画を観た」(20.7%)、「テレビで特集を観た」(12.0%)、「SNS(FaceBook、X(Twitter)、TikTok、Instagram 等)でニュースを観た」(8.0%)であった。「このジャンルは観なかった」は 45.0%であった。観戦した競技は、「車いすテニス」(44.8%)が最も多く、ついで、「水泳」(19.6%)、「車いすバスケットボール」(18.4%)、「開会式」(18.3%)、「車いすラグビー」(16.7%)であった。
- ◆ パリパラリンピックを観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(64.0%)が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(57.9%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」(55.0%)であった。すべての項目において、2021 年度調査より減少傾向にあった。
- ◆ 東京 2025 デフリンピックの認知度は、13.1%、愛知・名古屋 2026 アジアパラ競技大会の認知度は 11.8%だった。東京 2025 デフリンピックの観戦については、「デフリンピックを観戦したい」人が 21.6%、「デフリンピックに関するイベントに参加したい」が 12.0%、「デフリンピックに関するボランティアに参加したい」が 12.4%であった。手話を覚えたいは 29.6%であった。
- ◆ 日常生活の中で「障害のある人がスポーツを行う光景をみることがある」は 10.3%だった。2016 年度調査(6.0%)、2021 年度調査(9.4%)から徐々に増えている。その中で、見たスポーツの種目は、「バスケットボール」が 28.8%と最も多く、ついで、「テニス」20.8%、「陸上競技」19.8%、「水泳」19.3%、「ジョギング・ランニング」16.5%、「サッカー」12.7%、「ボッチャ」11.8%であり、いずれも 2021 年度調査から増加した。

調査報告

1. パラリンピアンの認知度

パラリンピアン 45 名を対象に認知度を尋ねた。45 名の抽出条件は以下のとおりである。

<条件①>

YMFS「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」(2025)において、パリ大会に出場した 175 名のうち、検索対象ワードとして、①“パラリン”、②“障害”AND“スポーツ”、③“障がい”AND“スポーツ”、④“パラスポーツ”を含む放送時間の多い上位 30 人

<条件②>

直近 4 大会(ロンドン大会、リオ大会、東京大会、パリ大会)に出場した選手(条件①の対象者を除く)
→14 人が対象

<条件③>

2021 年度調査時の放送時間上位 10 名であり、パリ大会に出場した選手(条件①②の対象者を除く)
→1 人が対象

条件①～③のいずれかを満たした選手 45 名を対象に調査した結果、最も認知度の高い選手は、「小田凱人」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、30.8%であった(図表 3-1)。ついで、「上地結衣」21.9%(知っている:12.4%、聞いたことがある:9.5%)、「池崎大輔」12.6%(知っている:4.7%、聞いたことがある:7.9%)、「木村敬一」7.6%(知っている:4.5%、聞いたことがある:3.1%)、「伊藤智也」7.3%(知っている:2.3%、聞いたことがある:5.0%)だった。前述の「知っている」「聞いたことがある」と回答した人を対象に実施競技について尋ねたところ、正答率が最も高かったのは「小田凱人(車いすテニス)」の 87.1%であった。ついで、「上地結衣(車いすテニス)」(72.3%)、「木村敬一(水泳)」(58.3%)、「道下美里(陸上競技)」(56.2%)、「池 透暢(車いすラグビー)」(43.7%)であった。

図表 3-1 パラリンピアンの認知度と正答率（上位 30 人）

（%）

NO	氏名	全体(n)	認知している			知らない	競技名	正誤率
				知っている	聞いたことがある			
1	小田 凱人（おだ ときと）	2,060	30.8	21.8	8.9	69.2	車いすテニス	87.1
2	上地 結衣（かみじ ゆい）	2,060	21.9	12.4	9.5	78.1	車いすテニス	72.3
3	池崎 大輔（いけざき だいすけ）	2,060	12.6	4.7	7.9	87.4	車いすラグビー	24.7
4	木村 敬一（きむら けいいち）	2,060	7.6	4.5	3.1	92.4	水泳	58.3
5	伊藤 智也（いとう ともや）	2,060	7.3	2.3	5.0	92.7	陸上競技	14.6
6	富田 宇宙（とみた うちゅう）	2,060	6.1	2.0	4.0	93.9	水泳	24.8
7	梶原 大暉（かじわら だいき）	2,060	5.7	1.8	3.9	94.3	バドミントン	9.3
8	鈴木 孝幸（すずき たかゆき）	2,060	5.4	2.4	3.1	94.6	水泳	38.4
9	道下 美里（みちした みさと）	2,060	5.1	3.2	1.9	94.9	陸上競技	56.2
10	和田 伸也（わだ しんや）	2,060	5.1	1.1	4.0	94.9	陸上競技	13.2
11	池 透暢（いけ ゆきのぶ）	2,060	5.0	2.4	2.6	95.0	車いすラグビー	43.7
12	佐野 優人（さの ゆうと）	2,060	5.0	1.6	3.4	95.0	ゴールボール	12.6
13	田中 愛美（たなか まなみ）	2,060	4.3	1.7	2.6	95.7	車いすテニス	9.0
14	中西 麻耶（なかにし まや）	2,060	4.2	1.6	2.6	95.8	陸上競技	39.5
15	石山 大輝（いしやま だいき）	2,060	4.2	1.6	2.7	95.8	陸上競技	12.6
16	遠藤 裕美（えんどう ひろみ）	2,060	4.1	1.2	2.9	95.9	ボッチャ	10.7
17	金子 和也（かねこ かずや）	2,060	3.9	1.2	2.8	96.1	ゴールボール	8.6
18	佐藤 友祈（さとう ともき）	2,060	3.7	1.7	2.0	96.3	陸上競技	19.5
19	杉浦 佳子（すぎうら けいこ）	2,060	3.6	1.7	1.8	96.4	自転車競技（ロード、トラック）	24.3
20	土田 和歌子（つちだ わかこ）	2,060	3.6	1.7	1.9	96.4	陸上競技	16.0
21	橋本 勝也（はしもと かつや）	2,060	3.6	1.4	2.2	96.4	車いすラグビー	6.8
22	齋藤 由希子（さいとう ゆきこ）	2,060	3.6	1.1	2.6	96.4	陸上競技	8.0
23	杉村 英孝（すぎむら ひでたか）	2,060	3.5	1.7	1.8	96.5	ボッチャ	32.9
24	里見 紗李奈（さとみ さりな）	2,060	3.5	1.2	2.3	96.5	バドミントン	19.4
25	小野 智華子（おの ちかこ）	2,060	3.4	1.2	2.2	96.6	水泳	17.1
26	倉橋 香衣（くらはし かえ）	2,060	3.2	0.9	2.2	96.8	車いすラグビー	20.0
27	辻内 彩野（つじうち あやの）	2,060	3.1	1.0	2.1	96.9	水泳	7.8
28	和田 なつき（わだ なつき）	2,060	3.1	1.0	2.1	96.9	卓球	7.8
29	木村 潤平（きむら じゅんぺい）	2,060	3.0	1.1	1.9	97.0	トライアスロン	9.8
30	廣瀬 順子（ひろせ じゅんこ）	2,060	2.9	1.2	1.7	97.1	柔道	11.9

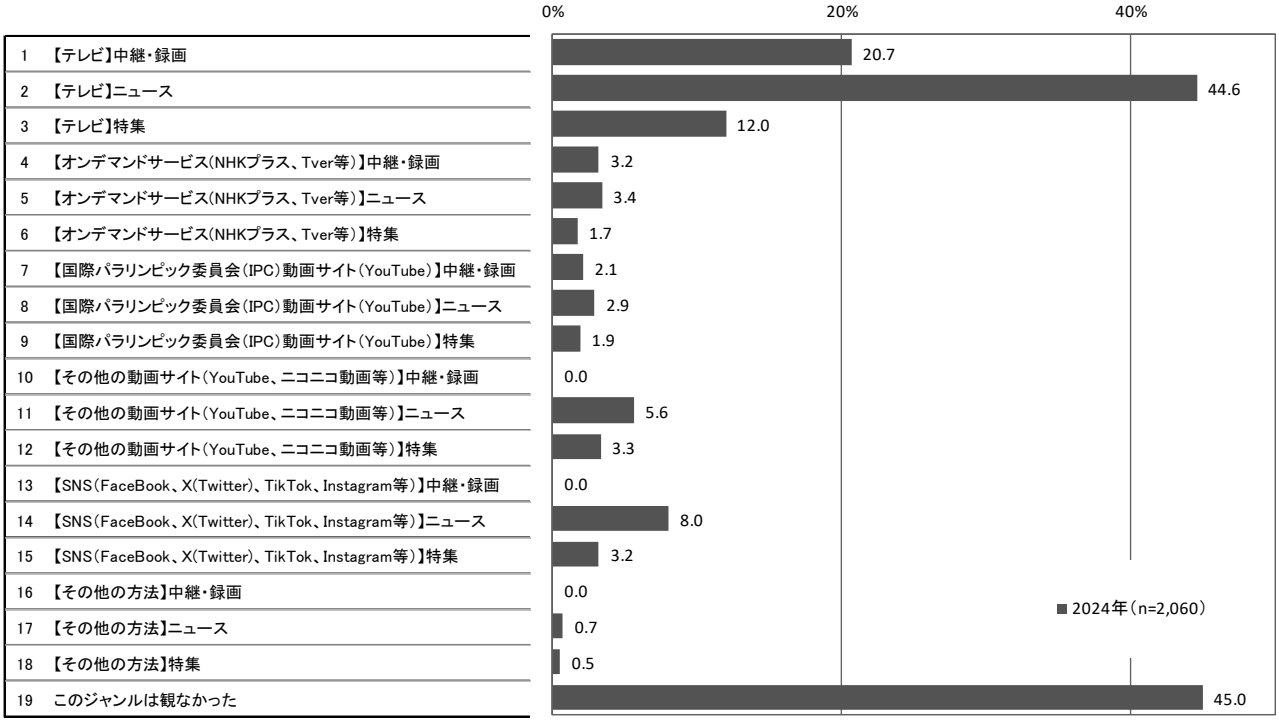
2. パラリンピックの観戦

2.1 パラリンピックの観戦形態

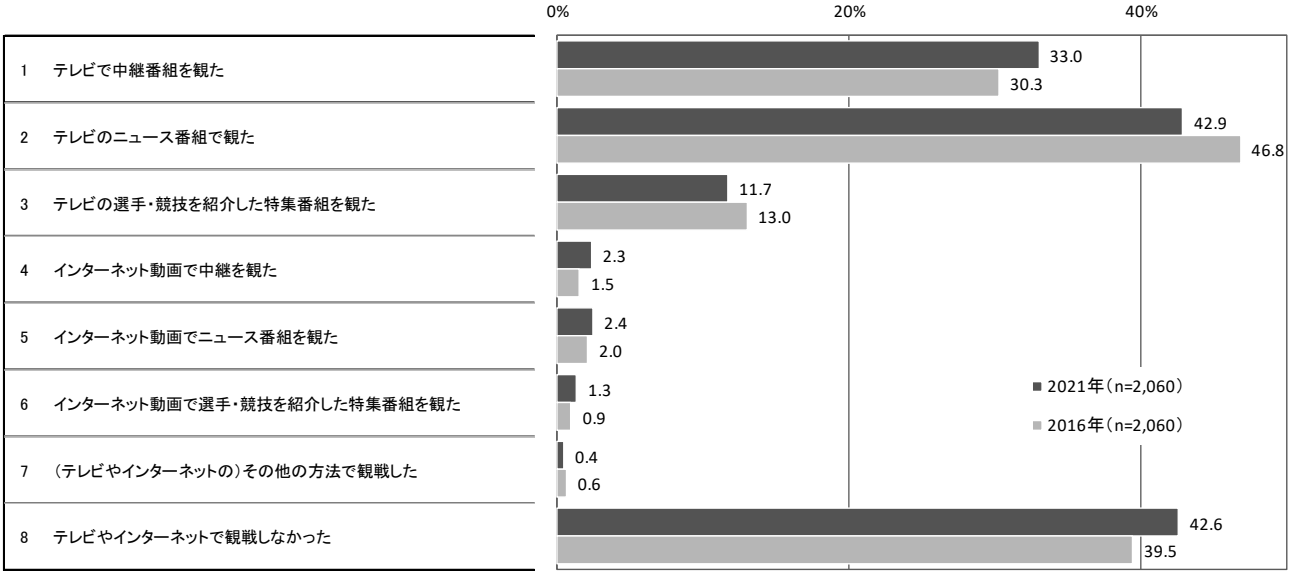
パリ大会の観戦形態について見ると、「【テレビ】ニュース」が 44.6%と最も多く、ついで、「【テレビ】中継・録画」(20.7%)であった(図表 3-2)。リオ大会・東京大会の観戦形態をまとめた図表 3-3 を見ると、「テレビのニュース番組で観た」が最も多く、リオ大会では 46.8%、東京大会では 42.9%だった。テレビのニュースでパラリンピックを観戦した割合は、ほとんど変わらなかった。一方で、「テレビで中継番組を観た」はリオ大会が 30.3%、東京大会が 33.0%だったが、テレビの中継や録画で観戦した割合は、パリ大会では約 2 割と減少していた。「テレビやインターネットで観戦しなかった」は、リオ大会で 39.5%、東京大会で 42.6%だったが、パリ大会では、テレビやインターネットを含めて「このジャンルは観なかった」が 45.0%となっており、パラリンピックを観戦しなかった割合は増加した。

本調査では、図表 3-3 で尋ねた「インターネット動画」を、「オンデマンドサービス(NHK プラス、TVer 等)」「国際パラリンピック委員会(IPC)動画サイト(YouTube)」「その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)」「SNS(Facebook、X(旧 Twitter)、TikTok、Instagram 等)」に細分化した。細分化したインターネット動画のうち、「【SNS(Facebook、X(旧 Twitter)、TikTok、Instagram 等)】ニュース」が 8.0%で最も多く、ついで「【その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)】ニュース」(5.6%)、「【その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)】特集」(3.3%)、「【SNS(Facebook、X(旧 Twitter)、TikTok、Instagram 等)】特集」(3.2%)だった。

図表 3-2 パリ大会の観戦形態（複数回答）



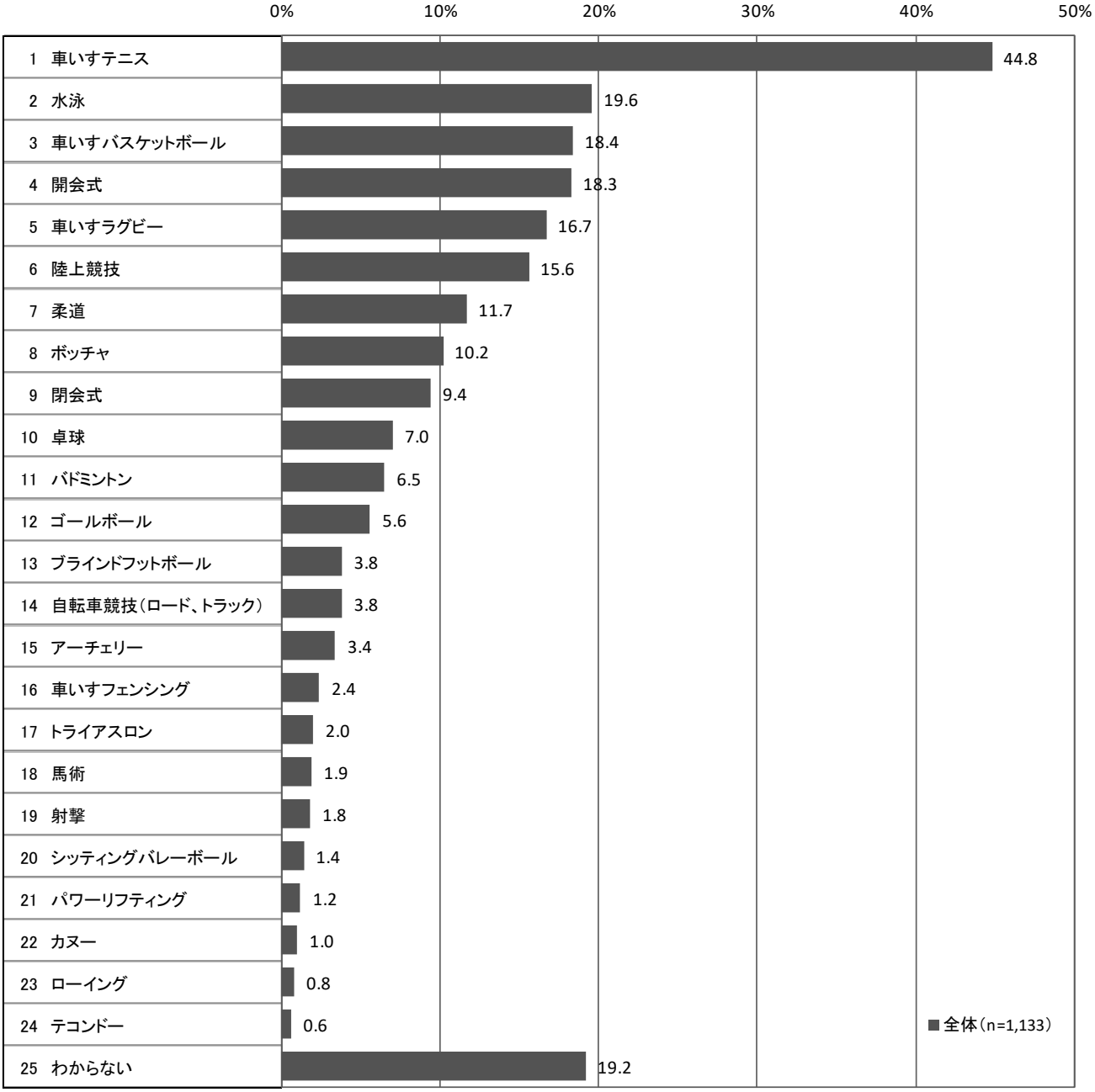
図表 3-3 【参考】リオ大会・東京大会の観戦形態（複数回答）



2.2 観戦種目

テレビやインターネットでパリ大会を観戦した人に観戦競技について尋ねたところ、「車いすテニス」が44.8％で最も多く、ついで、「水泳」（19.6％）、「車いすバスケットボール」（18.4％）、「開会式」（18.3％）、「車いすラグビー」（16.7％）、「陸上競技」（15.6％）であった（図表 3-4）。「わからない」は19.2％であった。

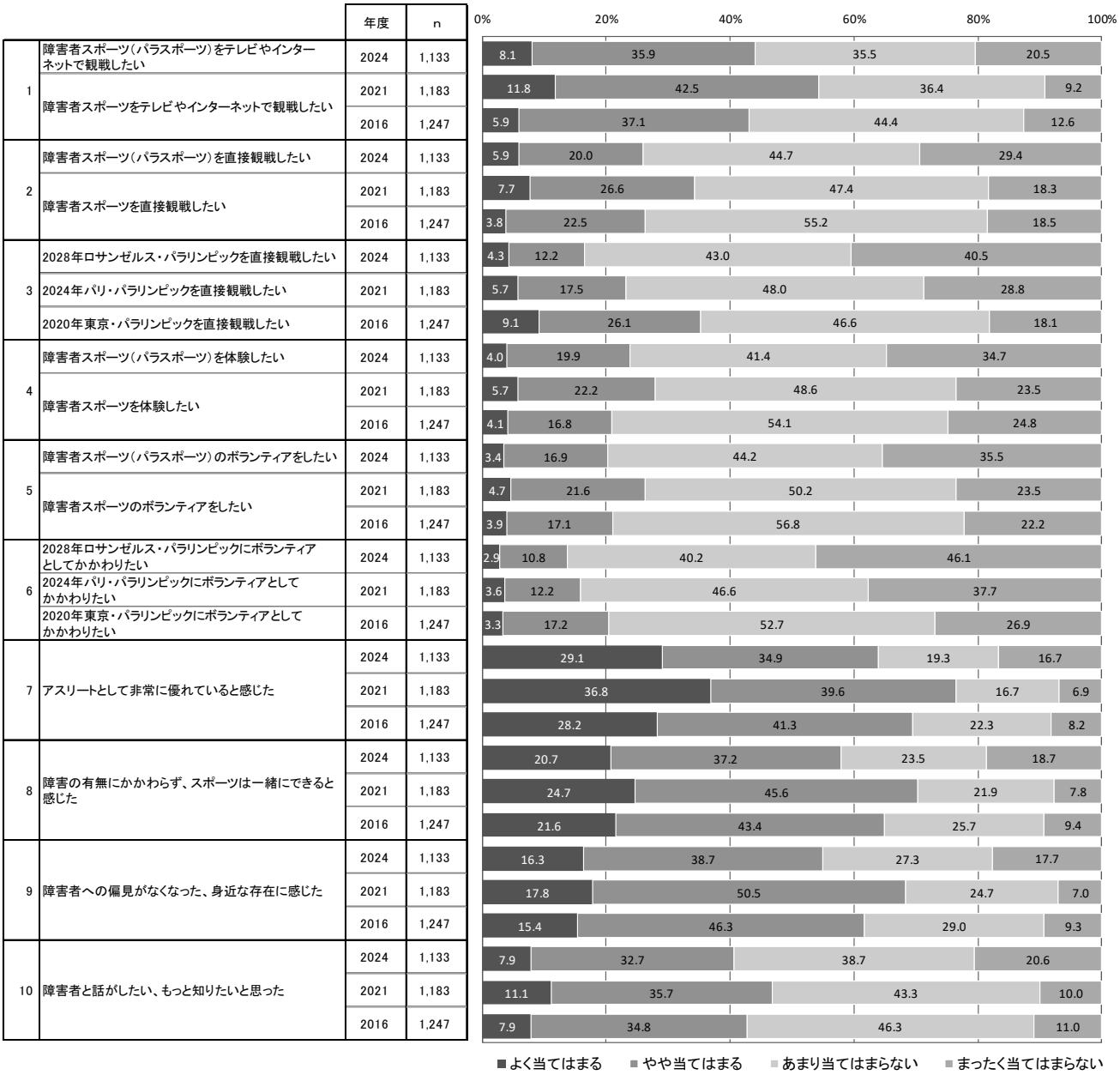
図表 3-4 パリ大会の観戦競技（複数回答）



2.3 大会観戦後の感想

テレビやインターネットでパリ大会を観戦した人に観戦後の感想について尋ねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった（図表 3-5）。「よく当てはまる」（29.1%）と「やや当てはまる」（34.9%）を合わせると 6 割を超えた。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」の 57.9%（よく当てはまる：20.7%、やや当てはまる：37.2%）、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」の 55.0%（よく当てはまる：16.3%、やや当てはまる：38.7%）であった。すべての設問において、2021 年度調査の数値より減少した。

図表 3-5 大会観戦後の感想



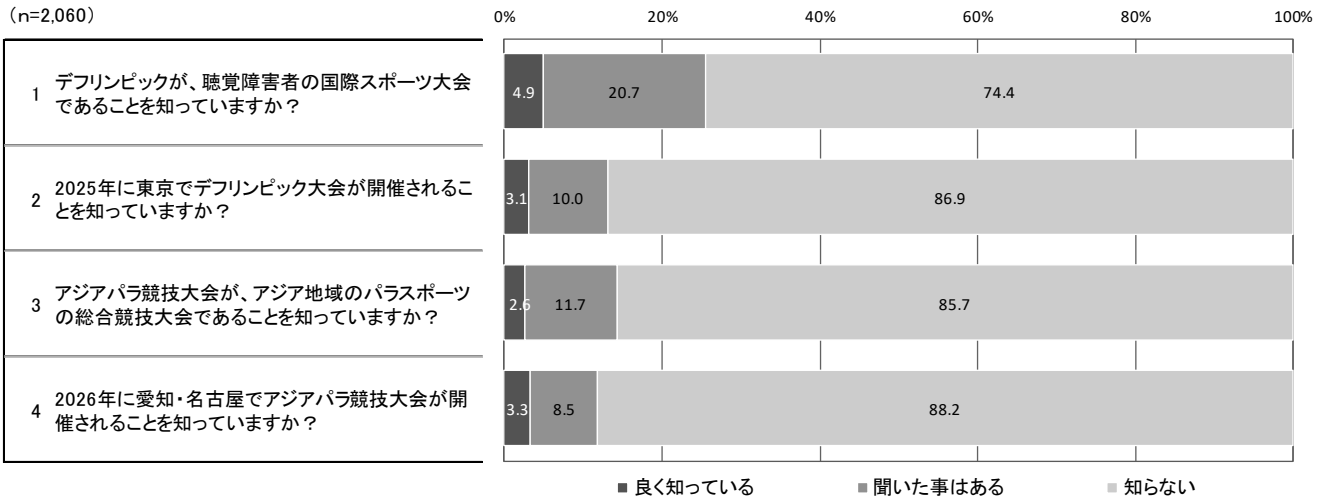
3. 東京 2025 デフリンピックと愛知・名古屋 2026 アジアパラ競技大会について

3.1 大会の認知度

デフリンピックが、聴覚障害者の国際スポーツ大会であることを知っていたのは、「良く知っている」(4.9%)と「聞いた事はある」(20.7%)を合わせて 25.6%であった(図表 3-6)。2025 年に東京でデフリンピック大会が開催されることを知っていたのは、「良く知っている」(3.1%)と「聞いた事はある」(10.0%)を合わせて 13.1%であった。

アジアパラ競技大会がアジア地域のパラスポーツの総合競技大会であることを知っていたのは、「良く知っている」(2.6%)と「聞いた事はある」(11.7%)を合わせて 14.3%であった。2026 年に愛知県と名古屋市でアジアパラ競技大会が開催されることを知っていたのは、「良く知っている」(3.3%)と「聞いた事はある」(8.5%)を合わせて 11.8%であった。

図表 3-6 デフリンピック、アジアパラ競技大会の認知度



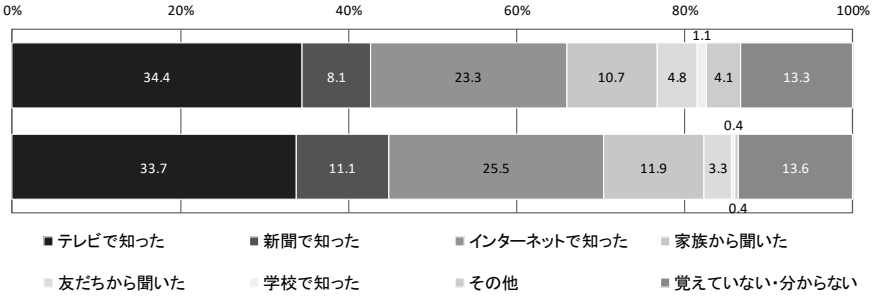
3．2　大会の認知経路

東京 2025 デフリンピックを知っている人に大会を知った経路について尋ねた（図表 3-7）。「テレビで知った」が 34.4％で最も多く、ついで「インターネットで知った」（23.3％）、「家族から聞いた」（10.7％）、「新聞で知った」（8.1％）であった。

同様に、愛知・名古屋 2026 アジアパラ競技大会を知っている人に大会を知った経路について尋ねたところ、「テレビで知った」が 33.7％で最も多く、ついで「インターネットで知った」（25.5％）、「家族から聞いた」（11.9％）、「新聞で知った」（11.1％）であった。

図表 3-7　大会の認知経路

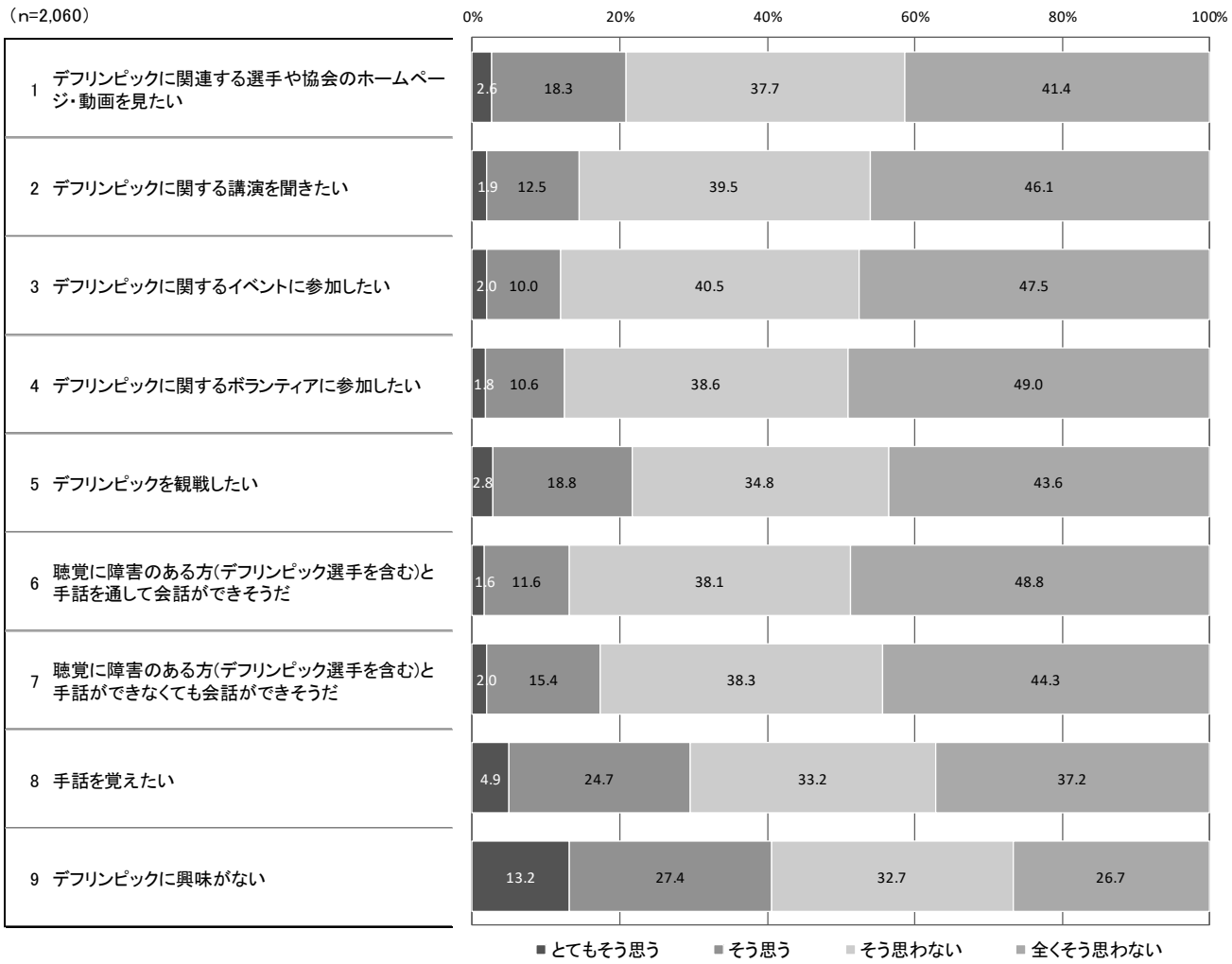
		全体（n）
1	東京2025デフリンピックを知っている	270
2	愛知・名古屋2026アジアパラ競技大会を知っている	243



3.3 東京 2025 デフリンピックへの関心度

東京 2025 デフリンピックの関心度について尋ねたところ、「デフリンピックを観戦したい」人は、「とてもそう思う」(2.8%)、「そう思う」(18.8%)を合わせて 21.6%であった(図表 3-8)。一方、「デフリンピックに興味がない」人は、「とてもそう思う」(13.2%)、「そう思う」(27.4%)を合わせて 40.6%であった。イベントやボランティアに参加したいか尋ねたところ、「デフリンピックに関するイベントに参加したい」が 12.0%(とてもそう思う:2.0%、そう思う:10.0%)、「デフリンピックに関するボランティアに参加したい」が 12.4%(とてもそう思う:1.8%、そう思う:10.6%)であった。聴覚障害のある方(デフリンピック選手を含む)との会話について尋ねたところ、手話を通して会話ができそうだと思う人は 13.2%(とてもそう思う:1.6%、そう思う:11.6%)、手話ができなくても会話ができそうだと思う人は 17.4%(とてもそう思う:2.0%、そう思う:15.4%)であった。手話を覚えたい人は 29.6%(とてもそう思う:4.9%、そう思う:24.7%)であった。

図表 3-8 東京 2025 デフリンピックへの関心度

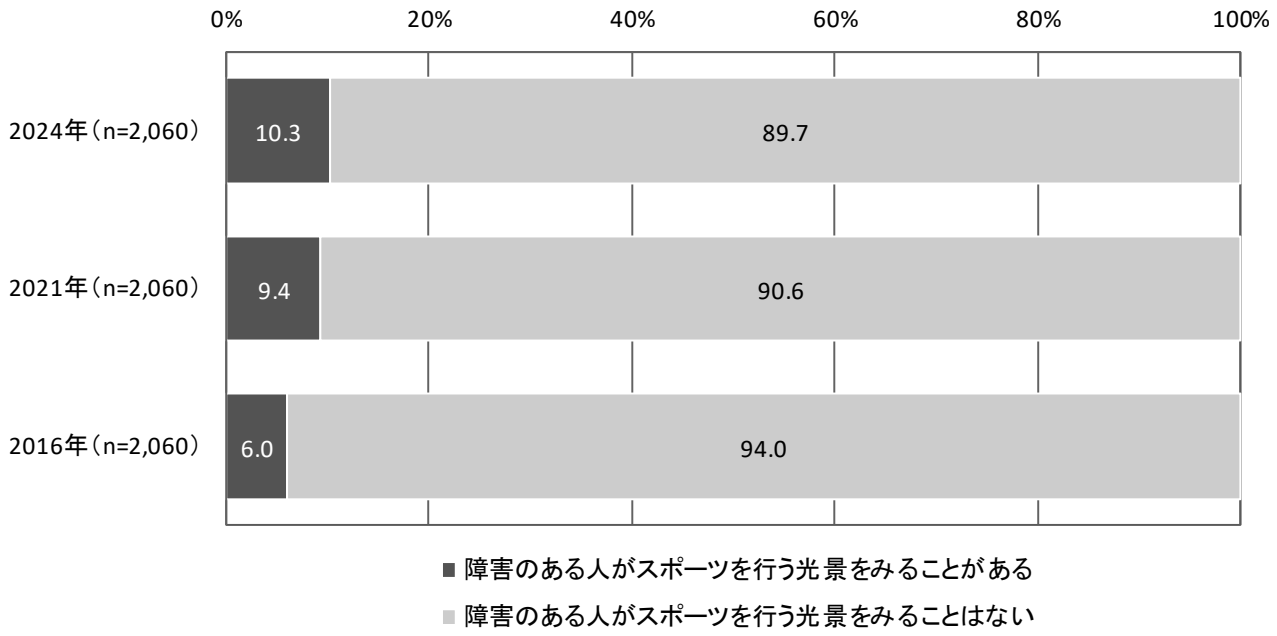


4. 障害者スポーツとの接点

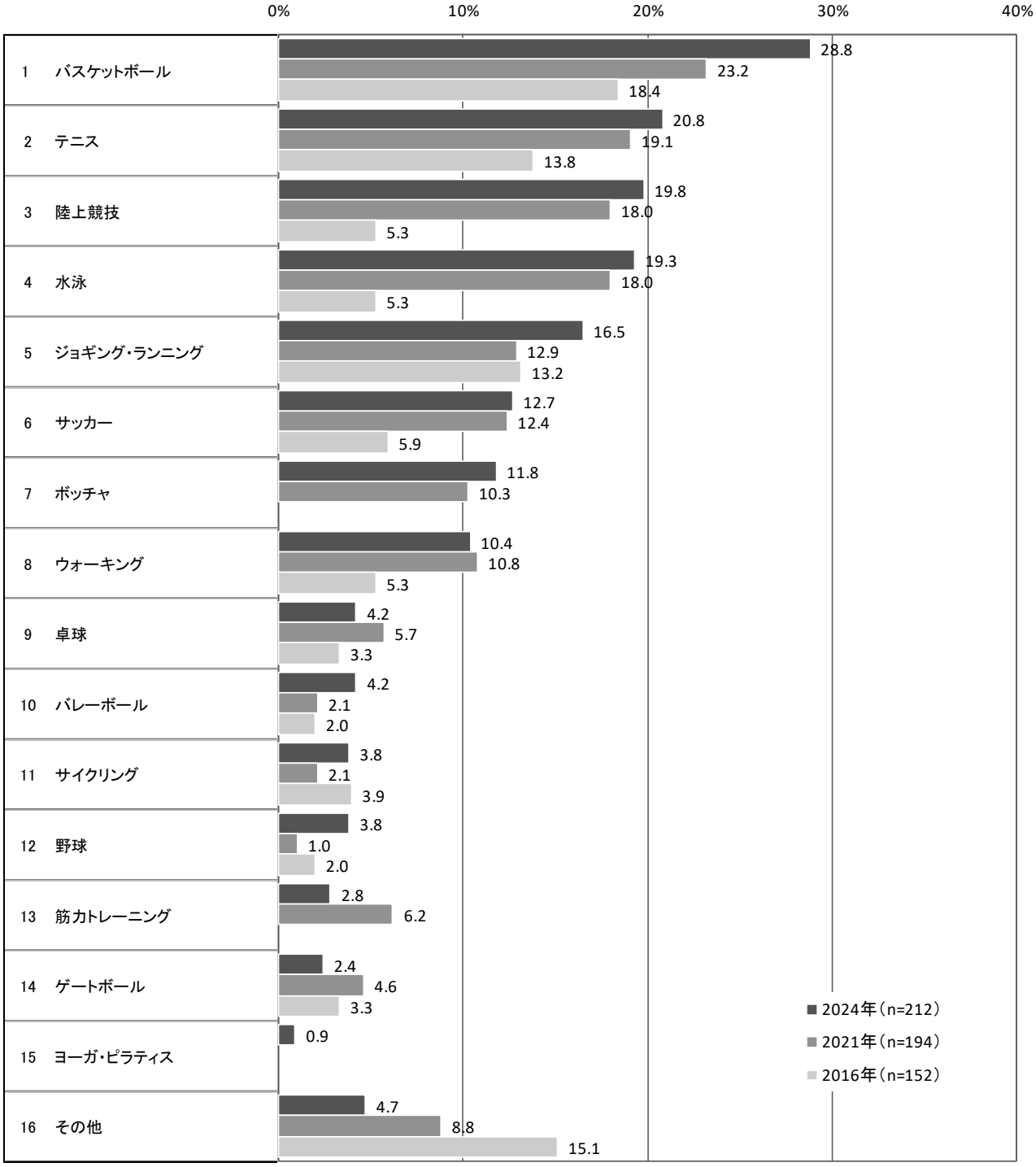
4.1 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがあるかについて尋ねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景をみることがある」は、10.3%に微増した（図表 3-9）。2016 年度調査（6.0%）、2021 年度調査（9.4%）から徐々に増えている。その光景の中で、見たスポーツ種目は、「バスケットボール」が 28.8%と最も多く、ついで、「テニス」20.8%、「陸上競技」19.8%、「水泳」19.3%、「ジョギング・ランニング」16.5%、「サッカー」12.7%、「ボッチャ」11.8%であり、いずれも 2021 年度調査から増加した。（図表 3-10）。

図表 3-9　障害のある人がスポーツを行う光景



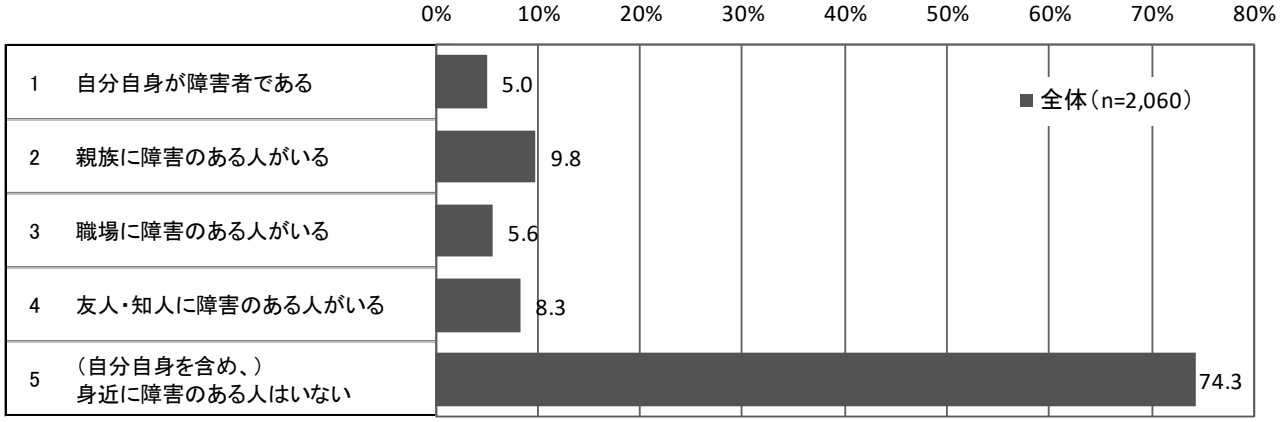
図表 3-10　障害のある人がスポーツを行う光景で見る種目一覧（複数回答）



4．2　身近に障害者がいるか否かの状況

身近に障害者がいるか否かについて尋ねたところ、「身近に障害のある人はいない」が 74.3％で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」（9.8％）、「友人・知人に障害のある人がいる」（8.3％）であった。「自分自身が障害者である」は 5.0％であった（図表 3-11）。

図表 3-11　身近に障害者がいるか否かの状況



5. クロス集計

5.1 身近に障害者がいるか否かで見るパラリンピック観戦

身近に障害者がいるか否かでパラリンピック観戦形態について見ると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビでニュースを観た」「テレビで特集を観た」「オンデマンドサービスで中継・録画を観た」「オンデマンドサービスでニュースを観た」「国際パラリンピック委員会の動画サイトで中継・録画を観た」「国際パラリンピック委員会の動画サイトでニュースを観た」「その他の動画サイトでニュースを観た」「その他の動画サイトで特集を観た」「SNSでニュースを観た」「SNSで特集を観た」が 1%水準で有意に高かった(図表 3-12)。

一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビで中継・録画を観た」「テレビで特集を観た」「オンデマンドサービスで中継・録画を観た」「オンデマンドサービスでニュースを観た」「その他の動画サイトでニュースを観た」「SNSでニュースを観た」が 1%水準で有意に低かった。「このジャンルは観なかった」非実施層は、「身近に障害のある人はいない」が 1%水準で有意に高かった。

図表 3-12 身近に障害者がいるか否かで見るパラリンピック観戦形態

【全体との差の検定】

有意水準	高	低
1%	▲	▼
5%	△	▽
10%	∴	∵

		全体 (%)	【テレビ】中継・録画	【テレビ】ニュース	【テレビ】特集	【オンデマンドサービス(NHKプラス、Tver等)】中継・録画	【オンデマンドサービス(NHKプラス、Tver等)】ニュース	【オンデマンドサービス(NHKプラス、Tver等)】特集	【国際パラリンピック委員会(IPC)動画サイト(YouTube)】中継・録画	【国際パラリンピック委員会(IPC)動画サイト(YouTube)】ニュース	【国際パラリンピック委員会(IPC)動画サイト(YouTube)】特集
全体		2,060	20.7	44.6	12.0	3.2	3.4	1.7	2.1	2.9	1.9
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	102	20.6	∵29.4	▽6.9	▲5.9	▲6.9	▲2.9	▲4.9	▲5.9	2.0
	自分以外の身近な人に障害者がいる	445	△27.2	▲48.5	▲16.6	▲5.8	▲6.3	2.2	▲4.3	▲4.3	2.5
	身近に障害のある人はいない	1,531	▼18.8	44.3	▼11.0	▼2.2	▼2.3	1.6	1.2	2.3	1.8

【全体との差の検定】

有意水準	高	低
1%	▲	▼
5%	△	▽
10%	∴	∵

		全体 (%)	【その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)】中継・録画	【その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)】ニュース	【その他の動画サイト(YouTube、ニコニコ動画等)】特集	【SNS(Facebook、Twitter、TikTok、Instagram等)】中継・録画	【SNS(Facebook、Twitter、TikTok、Instagram等)】ニュース	【SNS(Facebook、Twitter、TikTok、Instagram等)】特集	【その他の方法】中継・録画	【その他の方法】ニュース	【その他の方法】特集	このジャンルは観なかった
全体		2,060	−	5.6	3.3	−	8.0	3.2	−	0.7	0.5	45.0
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	102	−	5.9	2.9	−	▲11.8	▼2.0	−	▲3.9	1.0	△52.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	445	−	▲9.2	▲5.4	−	▲11.7	▲5.4	−	0.7	0.4	▽35.5
	身近に障害のある人はいない	1,531	−	▼4.4	2.8	−	▼6.7	2.7	−	0.5	0.5	▲47.4

5.2 身近に障害者がいるか否かで見る観戦後の感想

身近に障害者がいるか否かでパラリンピック観戦の感想を見た。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツを直接観戦したい」「2028 年ロサンゼルス・パラリンピックを直接観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「2028 年ロサンゼルス・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」が「よく当てはまる」において 1%水準で有意に高かった(図表 3-13)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、すべての項目で「よく当てはまる」において 1%水準で有意に低かった。

図表 3-13 身近に障害者がいるか否かで見る観戦後の感想

【全体との差の検定】

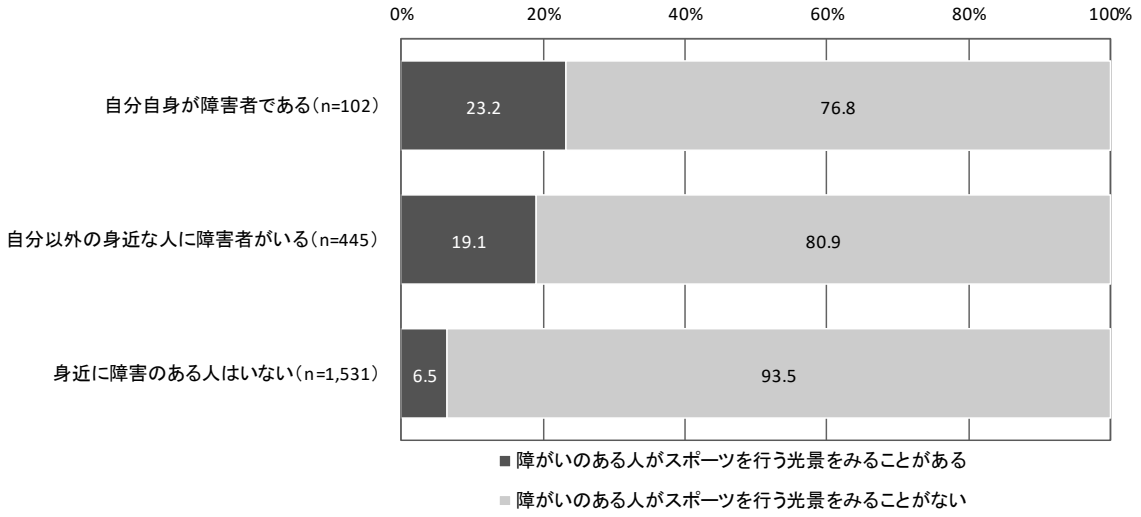
有意水準	高	低
1%	▲	▼
5%	△	▽
10%	∴	∵

		全体	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
障害者スポーツ(パラスポーツ)をテレビやインターネットで観戦したい	全体	1,133	8.1	35.9	35.5	20.5
	自分自身が障害者である	48	∴18.8	▲37.5	∵20.8	▲22.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	△14.3	△41.5	▼30.7	▽13.6
	身近に障害のある人はいない	806	▼5.2	▼34.0	▲38.0	▲22.8
障害者スポーツ(パラスポーツ)を直接観戦したい	全体	1,133	5.9	20.0	44.7	29.4
	自分自身が障害者である	48	△12.5	∴33.3	∵18.8	△35.4
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲9.4	△29.3	▽37.3	▽24.0
	身近に障害のある人はいない	806	▼4.2	▼16.1	▲48.5	▲31.1
2028年ロサンゼルス・パラリンピックを直接観戦したい	全体	1,133	4.3	12.2	43.0	40.5
	自分自身が障害者である	48	▲8.3	△18.8	∵29.2	▲43.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲7.3	▲17.1	▽37.6	▼38.0
	身近に障害のある人はいない	806	▼3.0	▼10.2	▲45.4	41.4
障害者スポーツ(パラスポーツ)を体験したい	全体	1,133	4.0	19.9	41.4	34.7
	自分自身が障害者である	48	△10.4	△25.0	∵20.8	△43.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲6.6	△26.8	▼37.3	▽29.3
	身近に障害のある人はいない	806	▼2.7	▼17.1	▲43.8	▲36.4
障害者スポーツ(パラスポーツ)のボランティアをしたい	全体	1,133	3.4	16.9	44.2	35.5
	自分自身が障害者である	48	△10.4	▼14.6	∵27.1	∴47.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲5.6	△24.7	▼40.4	▽29.3
	身近に障害のある人はいない	806	▼2.2	▼14.3	▲46.3	▲37.2
2028年ロサンゼルス・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	全体	1,133	2.9	10.8	40.2	46.1
	自分自身が障害者である	48	▲6.3	10.4	▽33.3	▲50.0
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲5.2	▲13.9	▼39.0	▼41.8
	身近に障害のある人はいない	806	▼1.9	▼9.7	41.1	▲47.4
アスリートとして非常に優れていると感じた	全体	1,133	29.1	34.9	19.3	16.7
	自分自身が障害者である	48	▼25.0	▼33.3	▼14.6	∴27.1
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	▲33.1	▲37.3	▼17.4	▼12.2
	身近に障害のある人はいない	806	▼27.9	34.1	20.2	▲17.7
障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた	全体	1,133	20.7	37.2	23.5	18.7
	自分自身が障害者である	48	▲25.0	▲39.6	∵12.5	▲22.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	△26.5	▼35.5	24.0	▼13.9
	身近に障害のある人はいない	806	▼18.4	37.6	23.8	▲20.2
障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	全体	1,133	16.3	38.7	27.3	17.7
	自分自身が障害者である	48	∴29.2	▽29.2	▼22.9	▲18.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	△22.0	39.0	▼26.1	▼12.9
	身近に障害のある人はいない	806	▼13.5	39.2	27.9	▲19.4
障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	全体	1,133	7.9	32.7	38.7	20.6
	自分自身が障害者である	48	△16.7	∴45.8	∵18.8	▼18.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	287	△12.9	△38.0	▽33.4	▼15.7
	身近に障害のある人はいない	806	▼5.7	▼30.0	▲41.8	▲22.5

5.3 身近に障害者がいるか否かで見る障害のある人のスポーツを行う光景

身近に障害者がいるか否かで、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無について尋ねたところ、「障がいのある人がスポーツを行う光景をみることがある」では、「自分自身が障害者である」が23.2%、「自分以外の身近な人に障害者がいる」が19.1%、「身近に障害のある人はいない」は6.5%だった(図表3-14)。

図表3-14 身近に障害者がいるか否かでみる障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無



5.4 日常生活で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別に見る観戦

日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別に観戦形態について見ると、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがある人の方が、「オンデマンドサービスで特集を観た」「国際パラリンピック委員会動画サイトで特集を観た」「その他の方法でニュースを観た」「その他の方法で特集を観た」において、1%水準で有意に高かった（図表 3-15）。一方で、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがない人は、「テレビで中継・録画を観た」「テレビでニュースを観た」「テレビで特集を観た」「オンデマンドサービスでニュースを観た」「国際パラリンピック委員会動画サイトでニュースを観た」「その他の動画サイトでニュースを観た」「SNSでニュースを観た」が 1%水準で有意に低かった。

図表 3-15 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別に見るパリパラリンピック大会の観戦形態

【全体との差の検定】
有意水準 高 低
1% ▲ ▼
5% △ ▽
10% ∴ ∵

		全体 (%)	【テレビ】中継・録画	【テレビ】ニュース	【テレビ】特集	【オンデマンドサービス（NHKプラス、Tver等）】中継・録画	【オンデマンドサービス（NHKプラス、Tver等）】ニュース	【オンデマンドサービス（NHKプラス、Tver等）】特集	【国際パラリンピック委員会（IPC）動画サイト（YouTube）】中継・録画	【国際パラリンピック委員会（IPC）動画サイト（YouTube）】ニュース	【国際パラリンピック委員会（IPC）動画サイト（YouTube）】特集
全体		2,060	20.7	44.6	12.0	3.2	3.4	1.7	2.1	2.9	1.9
あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。	ある	212	∴33.0	△53.8	△20.8	△9.9	∴15.6	▲6.1	△8.5	△12.7	▲5.7
	ない	1,848	▼19.3	▼43.6	▼11.0	2.4	▼2.0	1.2	1.4	▼1.8	1.5

【全体との差の検定】
有意水準 高 低
1% ▲ ▼
5% △ ▽
10% ∴ ∵

		全体 (%)	【その他の動画サイト（YouTube、ニコニコ動画等）】中継・録画	【その他の動画サイト（YouTube、ニコニコ動画等）】ニュース	【その他の動画サイト（YouTube、ニコニコ動画等）】特集	【SNS（Facebook、X（Twitter）、TikTok、Instagram等）】中継・録画	【SNS（Facebook、X（Twitter）、TikTok、Instagram等）】ニュース	【SNS（Facebook、X（Twitter）、TikTok、Instagram等）】特集	【その他の方法】中継・録画	【その他の方法】ニュース	【その他の方法】特集	このジャンルは観なかった
全体		2,060	－	5.6	3.3	－	8.0	3.2	－	0.7	0.5	45.0
あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。	ある	212	－	∴22.6	△10.8	－	∴22.6	△9.0	－	▲3.8	▲3.3	∵25.9
	ない	1,848	－	▼3.6	2.5	－	▼6.3	2.5	－	0.3	0.2	▲47.2

6. まとめと考察

本調査は、2016 年度調査、2021 年度調査で第 1 位だった「国枝慎吾」が現役引退後、初めて実施した認知度調査である。パリ大会に出場した 45 名のパラリンピアンを対象に認知度を尋ねたところ、第 1 位に輝いたのは「小田凱人」(「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 30.8%)だった。パリ大会で、金メダル獲得後に車輪を外してコートに倒れこんだ姿は多くの国民の記憶に残ったであろう。YMFS「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」(2025)によると、パリ大会で最も放送時間が多かったのも「小田凱人」(10 時間 54 分 8 秒)であった。これまで競技を超えパラスポーツの顔として、わが国のパラスポーツを牽引してきた国枝氏に代わり、小田選手が多くの国民から注目を浴びる存在になったといえる。第 2 位は「上地結衣」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 21.9%だった。小田選手同様、パリ大会で金メダルを獲得した上地選手は、2016 年度調査、2021 年度調査でも第 2 位に入っており、長年、高い認知度を誇っていることが改めて確認された。

認知度の推移を見るため、本調査上位 10 位までの選手の認知度と、2021 年度調査の認知度を比較した(図表 3-16)。

図表 3-16 パラリンピアンの認知度比較(2024 年度・2021 年度)

順位 (2024年度調査)	選手名(競技名)	認知度 (2024年度調査)	認知度 (2021年度調査)
1位	小田凱人(車いすテニス)	30.8%	※出場なし
2位	上地結衣(車いすテニス)	21.9%	22.5%
3位	池崎大輔(車いすラグビー)	12.6%	8.7%
4位	木村敬一(水泳)	7.6%	7.3%
5位	伊藤智也(陸上競技)	7.3%	4.6%
6位	富田宇宙(水泳)	6.1%	11.3%
7位	梶原大輝(バドミントン)	5.7%	対象外
8位	鈴木孝幸(水泳)	5.4%	6.9%
9位	道下美里(陸上競技)	5.1%	6.8%
10位	和田伸也(陸上競技)	5.1%	7.9%

YMFS「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」(2025)で明らかになったように、東京大会に比べて、パリ大会では障害者スポーツやパラリンピックに関する放送時間が激減し、それに伴い、パラリンピアンが取り上げられる機会も減少した。そうした影響もあり、上位 10 位までの選手の認知度は、2021 年度調査と比較して、必ずしも増加した選手ばかりではなかった。例えば、「上地結衣」は 22.5%(2021 年度調査)の認知度が 21.9%(2024 年度調査)に減少、放送時間も 8 時間 2 分 1 秒(2021 年度)から 3 時間 14 分 36 秒(2024 年度調査)と約 6 割減となった。同様に、「鈴木孝幸」は 6.9%(2021 年度調査)の認知度が 5.4%(2024 年度調査)に減少、放送時間も 6 時間 17 分 12 秒(2021 年度)から 3 時間 21 分 1 秒(2024 年度調査)と半減した。一方で、「池崎大輔」、「木村敬一」、「伊藤智也」は、放送時間は 2021 年度調査と比較して減少したが認知度は上がった。昨今、テレビ以外のメディアは多様化している。本調査では、これまでと異なり、インターネット動画はオンデマンドサービス、IPC 公式 YouTube、SNS などに細分化して尋ねるように変更した。そうした背景からも、テレビの放送時間だけで認知度の増減を分析することは難しく、現在ではテレビの放送時間とパラリンピアンの認知度の関係性は、参考として捉えるのが妥当と考える。

他方、メディアの多様化とは別に、パラリンピックの観戦状況について非観戦者層の増加が明らかになった。2016 年度調査時の非観戦者層は 39.5%、2021 年度調査時は 42.6%、本調査におけるパリ大会の非観戦者層は 45.0%と増加傾向にある。時差のない国内開催であった東京大会には各テレビ局が多くの放送時間を費やしていたが、観戦率増加にはつながらなかった。時差があるパリ大会、その上、テレビの放送時間が減少していた現状から非観戦者層の増加は、想定内の結果とも捉えることができる。

パリ大会観戦後の感想については、2021 年度調査同様、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(64.0%)が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(57.9%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」(55.0%)であった。大会観戦後の感想は、すべての設問で 2021 年度の調査結果を下回った。放送時間の減少もあり、肯定的な感想を持ちにくい状況があったと推察できる。

2025 年以降に国内で開催される東京 2025 デフリンピックと愛知・名古屋 2026 アジアパラの認知度を尋ねた。東京 2025 デフリンピックの認知度は 13.1%、愛知・名古屋 2026 アジアパラの認知度は 11.8%と、現時点ではいずれの認知度も低かった。2025 年 11 月に開催される東京 2025 デフリンピックまで 1 年を切っている中で、徐々に大会の情報に触れる機会が増え、認知度が上がることを期待する。

日常生活の中で「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」は、6.0%(2016 年度調査)、9.4%(2021 年度)、10.3%(2024 年度)と徐々に増えている。東京大会に向けて、障害者スポーツやパラリンピックの放送時間が増え、障害のない人がそれらの情報に触れる機会も増えた。さらに、地域で障害者スポーツの体験会や交流会、パラリンピック教育を受ける機会などが増え、そうした経験の積み重ねが、これまでは意識していなかった障害のある人がスポーツを行う光景に気づくようになった要因の一つとも考えられる。身近な環境に障害者がいるかどうかも、自身の行動に影響を与えている。2021 年度調査、および 2024 年度調査の結果から、パラリンピックの観戦状況やパラリンピック観戦後の感想について、身近に障害者がいる人の方が、身近に障害者がいない人よりも有意に高いことが明らかになった。一方で、身近に障害者がいない人は、日常生活で障害者がスポーツをする光景を見ることや、障害者ス

ポーツの体験希望やボランティア希望、障害者との交流などについて、有意に低いことも明らかになった。2013 年から始まったパラリンピックに向けた機運醸成も一段落し、東京大会をピークにパリ大会では放送時間が減少傾向に転じた。パラリンピック観戦後のポジティブな反応が、東京大会よりも下回ったことは、レガシーの視点では大きな課題と捉えるべきであろう。東京大会が終了し 3 年が過ぎた。大会終了後 10 年後、15 年後にレガシーの成果が表れると想定すると、現在はレガシーを残せるかどうかの過渡期にあるといえる。国民の意識や行動が大きく変化しパラダイムシフトのきっかけになったのか、国民の意識や行動の変化は一過性に過ぎなかったのかを見定める上で、日本の障害者スポーツ振興は分水嶺に立っていると考える。

（小淵和也）